法隆寺大鏡

第四十集

始

法隆寺大鏡第四十集挿圖解說

第一、第七、金堂　木彫着色觀世音菩薩立像

身長六尺九寸一分　臺高一尺二寸
光背高三尺七寸四分　幅二尺八寸五分

正面、正斜面、背斜面、背面、面部、面部斜面、光背

本像寺傳一に百濟觀音といひ、又臺座に虛空藏菩薩の銘記あるに依りて、一に此稱を正しとするが如くにも傳へられたり。されど數年前本像附屬の寶冠の新に發見せらるゝに及び、正面の化佛は明かに觀音の形相を示現せり。思ふに中古密教最盛の時代より後の名に改め傳へられたるものか。古今一陽集金堂の諸佛を擧げたる中に

虛空藏菩薩御七尺餘此尊像起因闕于古記古老傳謂異朝將來像不知其所以也

といへるは疑も無く此像を指せり。其の金堂に安置されたるは何時よりなるべきか。天平資財帳には金薄像と檀像との名のみありて彩色像の記されたるもの無ければ之に當らず。されど一陽集所說の如く斯像の全く古記に闕げたるか否かは疑ふべき餘地あり。古今目錄抄上冊金堂に關する記載の部分の裏書に

太子本尊阿彌陀厨子之後高在厨子、此內金銅佛菩薩幷木佛像坐、從昔口傳銀地藏菩薩五十餘體坐云々　此以外誤、一體所不見之也、此厨子幷佛菩薩像者、從橘寺所送之者也、日記在金堂

といひ、又續いて永久年中盜賊金堂に入りし事を記せる中にも

其時盜人邪推後方高厨子銀地藏菩薩五十五體御座云々此條以外僻事也、雖在木像更無銀像(下略)

といへり。こゝに所謂高厨子內の木佛こそ或は此の觀音像を指せるに非るか。此の厨子の前にありといふ太子本尊阿彌陀厨子は抄中別に之を記して「小厨子」といひ、中なる阿彌陀等三尊は孰れも白檀造一磔手半の坐像と見えたり。之に對して大厨子と言はず高厨子と呼ばれたるものこそ殊に長身七尺の立像に相應するの感あるなれ。凡そかゝる千古の靈像にして天平の勘錄に洩れたるは、かの玉蟲厨子と同じく、橘寺衰滅の後同寺より送られたるものと解するの外無く、從つて其移座が目錄抄以前の事實なりとすれば、彼の記者の細心を以て獨り此像の記載を遺すべしとも覺えず。所謂高厨子の記事は銀像の否定を主として木像に粗なるを憾みとするも、其橘寺傳來を明記せるの一事意義頗る深長なりといふべし。像はもと虛空藏菩薩として修正會の本尊の一たり。されば修正會が承曆三年講堂より金堂に移されし時、像も亦こゝに移座されたるなるべく、當寺開帳の例として本像を講堂に移すと寺記に見えたるは蓋し之に據るものか。推古期木彫の遺品中光背及び其の支柱の殊異の形狀によりて併せ觀るべきもの三あり。中宮寺及び夢殿の觀音と今像と即ち是れ也。之等の諸像を通觀して本期銅造の遺例に對比し、更に溯つて支那に於ける石彫の先型に比較考察するに、材料に依つて支配されたる先行の形式の牢乎として拔く可からざるものあるを知る。所詮之等は銅と化り木と變じて後も尙は石の彫刻たるを失はず。直立固定の姿態と層重樣を成せる衣文とは、鑄型の自由と刀法の變化とに沒交渉なる摩崖彫刻の殘影なり。此の意味に於て今像を我が木像彫刻中最も觚古なるものゝ一とするは何人も之を疑はじ。されど其の觚古は

決して技の生硬を意味するものに非ず。試みに今像に對比するに同じ立像なる夢殿觀音像を以てして其の形態美に關する工夫を吟味せんか。此れは腰細にして脚部の異常に長きが上に、袋を穿ちたる如き裙衣の勁直にして自然の趣に遠きを特色とし、彼れは腰より以下を左右に張りて、裙衣と纓衣と共に著しく下方に開くを異風とす。兩者共に左右均齊の態を持して形式的整美を求めたるは即ち一なり。然も一は極度の細長を形式化するに殆ど垂直に近き直線の並列を撰み、他は極度の重厚を形式的に寓するに下方に擴がれる曲線の堆積を以てす。其の兩者計營の分るゝ所一に双手の上下に伸びたると左右に張りたるとの形相の異同に存するを翫味し來れば、一見甚だ朴素なるが如くして然も驚くべき技巧の完成の偶然に非るを看取し得べし。この細長の態を極端の界域より救ひて微妙の調和を保てる前面幅廣の裙帶と左右曲率豐かなる纓衣とは、かの重厚の姿に好箇の諧調を爲せるものと同工異曲なりといふべく、臺座の逆蓮の單層にして狹長なると、重層にしてやゝ横に張りたると、兩々對比し來る毎に上代作家の用意の尋常ならざるを知るべし　更に一語を加へんか。吾人は今主として正面より見たる形態美について言へるが、先に所謂直線の並列は決して單純なる直線の謂には非ず、之を斜面若しくは側面より見るに從つて一層顯著なる、軀幹の反りをなせる曲線は、纓衣の變化ある曲線と相俟ちて一味溫雅の氣を加へたるを看過すべからざるなり。人若し尙は斯像の技の生硬を疑ふものあらば、寶冠と鐶釧と光背との勁健にして自在なる文樣を見よ。其の形態の甚だよく像と調和せると同じく、其の絕妙なる裝飾の技は造像そのものゝ手腕と相匹敵せり。かの金堂四天王像の銘記に特に鐵師の名の並び記されたる如く、斯像の裝飾家の大に推重すべきものあるを認むると共に、更に木彫家の輕視すべき所以を知らざるなり。

吾人は今斯像に就て更めて推古期彫刻の特色を指摘するの要無かるべし。たゞ玆に注意し置くべきもの二あり。一は臺座の五角形なること、他は光背の支柱を竹竿に擬したること是れ也。後者は前述の如く當代の作品中他に二つの遺例あるものにして、前者は獨り今像殊異の特色たり。後世多角形の臺座が六若しくは八を以て通式とするより見れば頗る奇異の感ありと雖も、此場合にありては光背支柱の位置を定むるに五角形の尖端を便としたるが爲め一に之に據りたるものと解せらる。此事甚だ微なるが如しと雖も內に重要なる意義を藏せり。吾人は先に法隆寺中門の正面が四間なる事を解して之れ先規無き時代に於ける自由の意匠に外ならずとなせり。今像臺座の異例も亦實に例以前の所產なる事に於て共通の精神に基くものに非るか。光背の支柱を竹竿に擬して作るは同種の光背ある凡ての遺品に通ずるより推して當代の一通式なりと解し得可し　吾人は未だ其の先型を徵すべき大陸の遺品に接せずと雖も、思ふに之れ或る近き時代に於て竹竿そのものを使用せるより脫化して、原始的なる形態を一轉技巧化したるものなるべし。而もなほ成熟せる技術を樸素の體に包みたるところに時代の特色を見るなり。更に一面に於ては彫刻と材料との關係を暗示する資料として多大の興味あるを覺ゆ。今像今奈良帝室博物館に出陳されあり。

第八、傳法堂　木彫藥師如來坐像

身長二尺九寸　臺高二尺一寸

第九、同　木彫着色釋迦如來坐像

身長二尺四寸　臺高二尺二寸

第十、—第十一、同　木彫阿彌陀如來坐像

身長二尺六寸五分　臺高二尺二寸五分

佛體及臺座　佛體斜面

傳法堂本尊以外の諸佛に就ては古今一陽集に「其外古佛餘多有之彼尼寺（中宮寺）荒廢之時因「爲「本寺「移「容當寺也」と見ゆ　凡そ奈良朝の中葉より藤原時代の末に至る諸種の遺作を藏し、特に優秀を以て稱すべきものあらざるも皆時代の好範たらざるは無し　こゝに揭げたる藥師、釋迦、彌陀三等身像の如き亦其の一也　藥師は所謂定朝風のやゝ末流に下らんとせるもの、典型の鰲縛既に重きを滅ぜしむるも、なは甚しく柔靡の態に陷らざるを賞すべし　藤原式九重座の完備に近きは此種の遺品の比較的僅少なるより見て一層珍重すべし　其の敷蕊子と框座とは最近の修補に係る　釋迦像は藥師像に對して一時代を先てるもの、正に定朝以前の風にして、貞觀式刀法の鋭利なるを見るべし。臺座蓮肉以外の部分と兩手先及び裳端とは、藥師像と同じく最近の修補に係れり。阿彌陀像は更らに一時代を隔てゝ天平の盛期に屬す。其の衣文の雄麗にして自在なる、木彫にして巧みに夾紵の手法を混じたるもの、臺座は之と時を同じうせずと雖も、平安初期の遺品とし又好箇の資料たり。之を要するに上記の三像は夫々奈良・平安・藤原の三時代を現はすものにして、傳法堂の諸像も亦之によりて略ぼ代表されたりといふも不可なからん　因に曰ふ、阿彌陀像は今奈良帝室博物館出陳中なり。

第十二、御物紙本墨書法華經（實大）

第十三、—第十四、御物香木法華經筥

蓋　竪一尺二寸三分五厘　幅六寸四分

高一寸　身竪一尺二寸一分

幅六寸二分五厘　高三寸五分

表面　側面

所謂妹子將來の法華經と其經臺とは爾輯に之れを揭げたり　今此の法華經と經筥とは傳來の彼れが如く揭焉なるものあるに非ず、現存の寺記には全く其の由緒を尋ぬべき資さへ無しと雖も、然も上宮太子と法華經との淺からぬ因緣をおもへば、斯經の靈寶中に存する事また偶然にあらず　經は黄紙烏系欄行十七字の普通なる寫經體にして書風も亦奈良朝に於ける最盛期の寫經風を現はせり　筥は此經八卷を收めて極めてよく適合す　香木の貴重なる、菱形の一片をもなほ二枚を合せて作りたるところあり、内側の如きは竪に數片を矧合せ、一片の中更に橫に數箇の小片を矧合せたるものさへあり　本來何等裝飾の手段を加へずして專ら素材の美を發揮せしものなれば、表面木質の變化せる今に於ては原形を偲ぶに遺憾多し　されど菱形の幅を廣濶なる蓋の表面と、やゝ狹小なる蓋及び身の側面とによりて變化せるが如き美的工夫は（前者は長さ二寸に對して幅一寸後者は同じく長さに對して幅八分）閑雅なる古色と共に掬するに堪へたり

第十五、御物鈞升

高一尺六分　口徑　二尺二寸八分乃至二尺四寸五分

古今一陽集寬元御開封日記所令漏脫靈物の中に

大鉢 石四斗云々 銘重大廿六斤受一代升平 壹

といへるもの是也。外側の緣に近く

重大廿六斤受一石四斗

の十字を雙鉤體に鐫刻す。重は鉢の自重にして受は積量の義なるべし。

第十六、御物香木經臺（其四）

詳細は前輯に說けり。香狹間の周圍玳瑁を薄く蔽へる下に、盛上彩色をもて樹木花鳥を畫きたるさまを一層よく現はさんとてこゝに再び其の細部を揭ぐ。

第十七、上宮王院門前境內

第十八、東大門前境內

第十七圖は西院東大門より上宮王院門前に至る境內なり。現存塔中と廢寺との名を列擧すれば次の如し

現存塔中

律學院　宗源寺（一名金光院）　福生院　善住院　福園院（一名蓮光院）

廢寺

賢聖院　持寶院　文珠院　興善院　蓮池院　法花院　發志院

第十八圖は西院東大門より西大門に至る境內なり。

現存塔中

普門院　實相院　彌勒院　寶光院　西園院　地藏院　中院

寶珠院

廢寺

安養院　松立院　花園院　阿彌陀院　正藏院　觀音院　橘坊

西之院　明王院　威德坊　吉祥院　西南院　圓明院

金堂 木彫着色觀世音菩薩立像（五）

金寺 木彫着色觀世音菩薩立像 二〇〇

金堂 木彫着色觀世音菩薩像

金堂 木造着色觀世音菩薩立像（背面）

金堂 木彫着色觀世音菩薩立像 （七五）

室生寺彌勒堂釋迦如來坐像

傳法寺本尊着色釋迦如來坐像

[illegible]

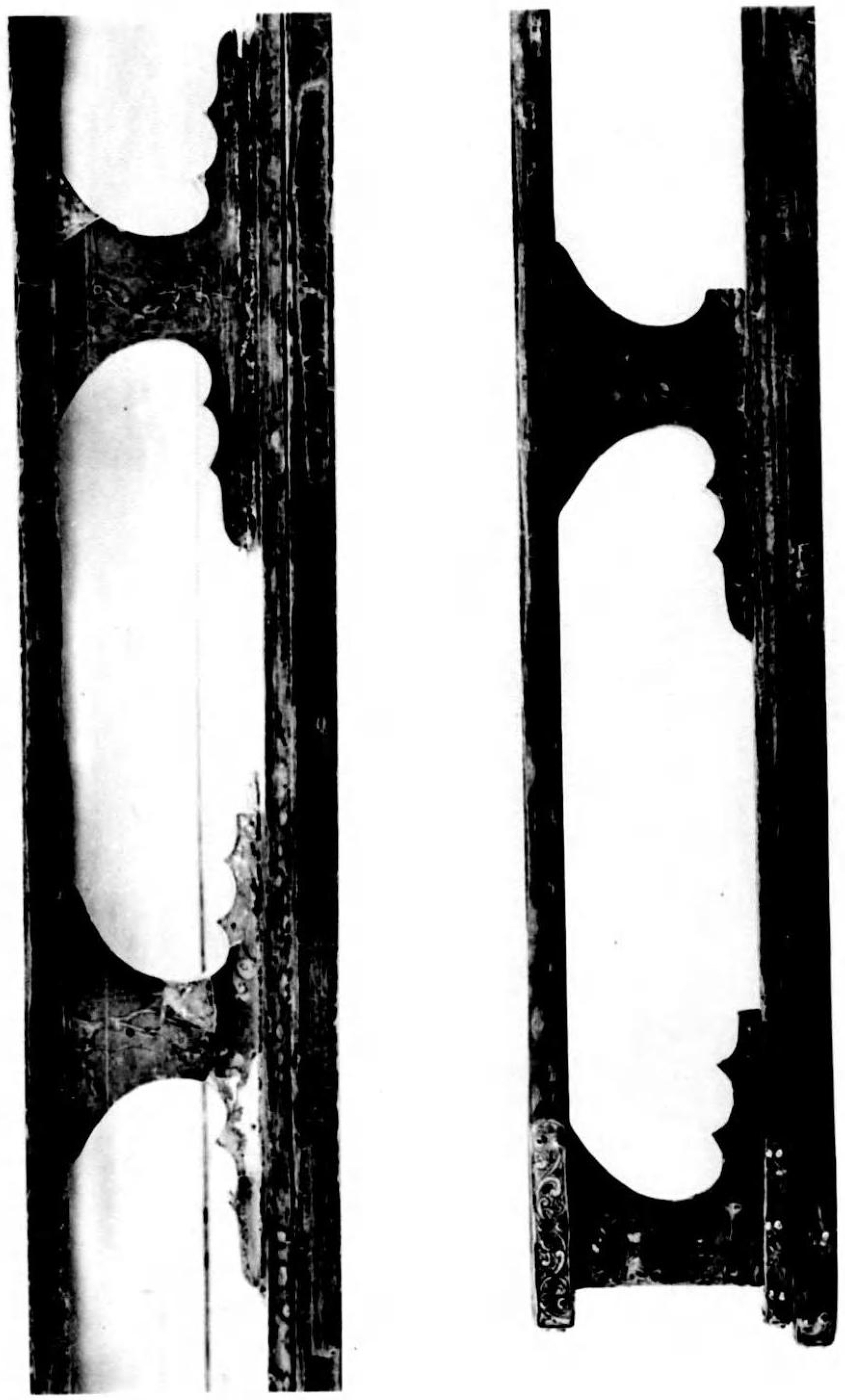
妙法蓮華經序品第一
如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中與大
比丘衆萬二千人倶皆是阿羅漢諸漏已盡
無復煩惱逮得己利盡諸有結心得自在其
名曰阿若憍陳如摩訶迦葉優樓頻螺迦葉
伽耶迦葉那提迦葉舍利弗大目揵連摩訶
迦旃延阿㝹樓馱劫賓那憍梵波提離婆多
畢陵伽婆蹉薄拘羅摩訶拘絺羅難陀孫陀
羅難陀富樓那弥多羅尼子須菩提阿難羅
睺羅如是衆所知識大阿羅漢等復有學無

御物　一　紙本墨書法華經

[illegible]

（一五）[illegible]木箱　局部

御物（約一升五…）



上宮王院門南境内

東大門前道路

大正六年二月廿四日印刷
大正六年二月廿八日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者　東京市下谷區上根岸町百廿二番地　白石村治
印刷者　東京市下谷區中根岸町六十八番地　武田勝之助
印刷所　東京市下谷區中根岸町六十八番地　墨彩堂

終

414
4